白樺サロンの会について

「あをによし奈良の都は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり」
（万葉集）
遣唐使安倍仲麿（あべのなかまろ）が唐土で詠じた望郷の歌
「あまの原ふりさけみれば春日なるみかさの山にいでし月かも」
（古今和歌集）
古都奈良の地は千年の風雪を越えてなおその美を歌う。
この廃都の地を、名画の残欠が美しいようにうつくしい、と志賀直哉は言い、旧居における自身の思索を「手帖から」に記している。
地に、古代の白眉が優に千年を越えて伝わり、近代に脱俗の場所として画家や作家が住み着いた。
伝わる美の世界は歴史を超える普遍的な人間の意味を、静謐なその地は、深い思索をわれわれに与える。
奈良高畑に残された有形、無形のこの遺産を継承して、芸術、文学、さらには文明への思索が刊行の『りずむ』に綴られる。
思索から人のまじわりへ、この願いを込めて「白樺サロンの会」と改めて名付けられる。会の講座はこのまじわりのひととき。
たぐいまれな歴史の地から知の世界へ・・・しずかな時が奈良に流れる。

令和四(二〇二二)年度　志賀直哉旧居特別講座（白樺サロンの会）

―古都のひととき、文学と美・芸術への願い・・・コロナ禍を越えて―

われわれは、名作を前にして立ち去り難く、惹かれます。古都はこの美の世界を古年の堂宇に織りなし、はるかな時を越え、なお今に在ります。過去の単なる遺物ではない芸術の真の生命に触れながら、古（いにしえ）に返り、あるいは今日に立って、春日の麓、たぐいまれな古都奈良のこの一画で、文学作品や芸術の美について、以下の演題でお話したく思います。

6月20日（月）10時30分～12時
「志賀直哉の大山の一夜」
呉谷充利（相愛大学名誉教授）

25年の歳月を要した『暗夜行路』が奈良の旧居において完成する。この長編小説は最終章にみずからの実体験を綴る大山の一夜を描いており、志賀文学においてこの大山の一夜の描写は重要な意味をもつように思われます。志賀直哉がいうリズムに着目し、山崎正和の『リズムの哲学ノート』を拠り所にしながら、その体験について考えてみたく思います。この長編に先立つ「イヅク川」、「和解」を通して、その創作の足取りを辿ってみます。

8月15日（月）14時～15時30分
「戦争と美術」
平瀬礼太（美術史家・愛知県美術館）

毎年夏には戦争を振り返る特集やイベントが繰り返される。戦争を忘れてはならぬ、という認識は共有し得たとしても、少しずつ風化していく現実に抗えないもどかしさも、これまた毎年恒例のようにつきまとう。この意味で今年は、残念ながらも戦争のリアリティを強く感じつつ、その意味を再考するに適切な状況に置かれている。普段はなかなか結びつくことのない、戦争と美術のつながりをこのような時期に、あらためて考えてみたい。

10月3日（月）14時～15時30分
「毘沙門天像の成立と展開」
佐藤有希子（奈良女子大学文学部准教授）

毘沙門天は、インド古来の神を淵源とし、仏教における四天王の一尊として北方守護の職能を担った尊格である。四天王のうちで最も高位の存在として、各時代・地域において天部系尊格のなかでも、特殊な信仰と造像が行われた。

毘沙門天はいかにして四天王から独立し、信仰されたのだろうか。毘沙門天が独立して信仰されたり、あるいは四天王のなかでも特殊な姿であらわされたのは、一つは「兜跋」毘沙門という異形の姿、もう一つは、毘沙門天が手に持っているという釈迦の遺骨、すなわち「舎利」に由来するのではないか、と私は考えている。この仮説を検証しつつ、毘沙門天信仰がアジアから日本へ広まる経緯と、歴史を経るにしたがい変容していった造形について紹介する。

10月10日（月）10時30分～12時
「写実画家・野田弘志　その作品と、目指す「真理」」
深谷　聡（奈良県立美術館）

奈良県立美術館で特別展「野田弘志　真理のリアリズム」を開催中の写実画家、野田弘志先生の作品から、西洋絵画の伝統から学び、現代の写実の中で邁進する作品の変遷、そして追い求める写実の真理というテーマについて読み解いていきます。

11月21日（月）10時30分～12時
「志賀直哉「流行感冒」を読む」
吉川仁子（奈良女子大学文学部准教授）

コロナウイルスの流行後、人間と感染症との闘いを描いた文学作品の紹介が相次ぎました。志賀直哉の「流行感冒」もその一つで、２０２１年にはＮＨＫでドラマ化もされましたのでご存じの方も多いでしょう。スペイン風邪の流行期を描いたこの作品は、コロナに翻弄される私たちに重なるのはもちろんのこと、主人公「私」の潔癖さがよく表れた作品です。この作品は当初「流行感冒と石」という題名でした。「石」というのは主人公「私」の家で働く下女の名前です。流行感冒と下女・石を巡る本作を丁寧に

読み、そこに表れる、感染症に対してだけではない「私」の潔癖な性質について考えてみたいと思います。「私」は志賀直哉に重なる人物ですが、病気を極度に恐れる「私」の、わが子に対する思いについても、志賀の他作品を参照しつつ確認してみましょう。

12月19日（月）10時30分～12時
「アルベール・カミュの『カリギュラ』、その意味と演出――小栗旬と菅田将暉」
東浦弘樹（関西学院大学教授）

フランスのノーベル賞作家アルベール・カミュ（1913−1960）は小説家・哲学者として名高いが、同時に劇作家でもあった。本講座では2019年に栗山民也演出、菅田将暉主演で上演されたカミュの戯曲『カリギュラ』を取り上げ、2007年に蜷川幸雄演出、小栗旬主演で上演された『カリギュラ』との比較も交えつつ、その演出や作品の持つ意味について考えたい。

2023年1月16日（月）10時30分～12時
「泉鏡花『薺』・『蝶々の目』とその叙述について」
西尾元伸（帝塚山大学准教授）

泉鏡花『薺』（大正10）・『蝶々の目』（大正10）は、「斜向ひ」の少女《みんみい》を可愛がる「我児のない」夫婦の姿を描く作品です。作品は《圭吉》なる人物から作者が聞いた話という形式をとりますが、鏡花自身の体験が色濃く反映されていると考えられるものです。幻想譚の多い鏡花作品にあって、身近な出来事を飾らずにとりあげた数少ない作品とも言えます。しかし、これらの作品が書かれたのは少女が夭折して約二年の時間が経過した後でした。今回の講座では、その叙述方法に注目しながら、鏡花夫妻と少女との交流をたどってみたいと思います。

編集後記

呉谷充利「志賀直哉「ナイルの水の一滴」―西洋的なもの、日本的なもの―」

本稿は前号の『りずむ』第十一号の続編になっており、志賀直哉の三つの作品、「イヅク川」『和解』『暗夜行路』を貫く身体の意味を主題化し、「ナイルの水の一滴」を結実としている。最晩年、新聞紙上に掲載されたこの一文が、鈴木大拙の見方に拠っていることを示しながら、著者は、両者の違いを鈴木の宗教的観想にたいする志賀の文学的リアリズムに見て、志賀の文学にみる求道性を西洋二十世紀の身体論を交え、東亜・日本的な身体にいう。

吉川仁子氏「志賀直哉「佐々木の場合」と夏目漱石『行人』」

夏目漱石と志賀直哉をめぐる論考である。「心」のあと、漱石が直哉に朝日新聞の連載を依頼した理由に、その高い評価が『留女』にあったことを述べながら、著者は、志賀の断念に至る経緯を当時の書簡によりながら丹念に紐解いている。漱石は、直哉の連載辞退に戸惑いながらも、作品に対するつよい芸術的信念を見て、これを受け入れるも、なお彼に対する気持ちは揺るがず、これに応えられなかった志賀直哉は、夏目漱石への敬意と謝意を込めて「佐々木の場合」を墓前に捧げたのである。著者は、二人に文学者としての真の交わりを見て、志賀直哉「佐々木の場合」と夏目漱石『行人』を主題化し、この二つの作品を考察している。臨場感の伝わる論考である。

東浦弘樹氏「プロパガンダ演劇を超えて―ジャン＝ポール・サルトルの『恭しき娼婦』―」

りずむ第八号に著者が併読を願う「カミュ研究者が見たサルトルの『出口なし』」があり、リポジトリにこれが掲載されているので、再読いただきたい。本稿は表題のとおり、プロパガンダを含まない演劇論としてサルトルの『恭しき娼婦』を論じる。著者の巧みな解説によって、我々はさながらこの演目を目の当たりにするがごとく臨場感にさそわれる。著者は「やるせない、救いのない芝居であった」としながらも、「そのやるせなさ、救いのなさこそ」が、「一つの芸術作品に仕上げていた」とし、「人間の真実を描くことが芝居の使命であるならば、薄っぺらな人間の薄っぺらさを描くこともまた、人間の真実を描くことだからである」と結んでいる。

西尾元伸氏「泉鏡花『菎蒻本』小攷―蠟燭と嗅覚のリアリティ―」

蝋燭の香に仄めかされる怪奇の世界が泉鏡花『菎蒻本』に描かれる。本稿はそのストーリーを追って考察されている。幻想でありながら、その幻想の世界がリアリティーを以て迫る。燃えさしの蝋燭のにおいがこの二つの世界をつなぐ。著者が「泉鏡花は、

明治四十二年から没年となる昭和十四年まで番町に暮らした。『崑蒟本』（大正2）は、鏡花のいわゆる〈番町もの〉といわれる作品のひとつである」とするとおり、実際の東京の地積がこの怪奇担舞台になっている。「本作が当時の番町の風物を取り込んで成立していることは確か」なのである。とすれば「前近代的な怪異譚の舞台かのように語られていながら、その実は極めて現実的な場所でもある」この地に遺されて生ける江戸の情調の上に生まれていよう。著者は「前近代的な怪異を志向することは、過去への通廊となるのではないか。だから、奇態を伝える噂の言葉が蠟燭の「香」（おひ）のリアリティを得るとき、大正二年でさえも怪異に遭遇することになる。本作が描き出すのは、そうした怪異譚ではないだろうか」という。

平瀬礼太氏「加島信成、またの名を加島菱州」

平瀬氏によるこの論考は、明治期にその名を見る加島信成（別名：加島菱州）について考察を試みたものである。ひと言でいえばこの人物は風変わりなキャリアを持つ「油画師」なのである。なぜかといえば、いわゆる画家でありながら「福沢諭吉の提唱で創立した実業家社交団体である交詢社に入会している」実業家の側面を見せるからである。文人画家であり、経済的実業家でもあるという、一見相いれないこの風貌に著者は戸惑う。その手になる絵を見ない著者は、「加島描くところの明治初期関西発油彩画の実物をいくつか、きちんと見てみたい」と結ぶ。私見を交えれば、それは明治という時代の偽らざる一つの姿であったのかもしれない。

（KM記）